

# 令和4年度入学者選抜試験

## 学校推薦型選抜問題

### 小論文 (120分)

(建築学科)

#### 注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、6ページあります。
- 3 解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚あります。解答用紙には解答欄以外に受験番号欄と氏名欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入しなさい。  
ただし、得点欄と整理番号欄は記入してはいけません。  
なお、解答は最初のひとマスを空けず、改行せずに続けて記入しなさい。  
また、行末以外は句読点も1文字分として当てなさい。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 下書き用紙は、下書き等に利用してもよろしい。
- 7 試験終了後、下書き用紙及び問題冊子は持ち帰りなさい。

問題1 次の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

ある夜、友人とこんな話をしたことがある。私たちはアラスカの氷河の上で野営をしていて、空は降るような星空だった。オーロラを待っていたのだが、その気配はなく、雪の上に座って満天の星を眺めていた。月も消え、暗黒の世界に信じられぬ数の星がきらめいていた。時おり、その中を流れ星が長い線を引きながら落ちていった。

「これだけの星が毎晩東京で見られたらすごいだろうなあ……夜遅く、仕事に疲れた会社帰り、ふと見上げると、手が届きそうなところに宇宙がある。一日の終わりに、どんな奴だって、何かを考えるだろうな」

「いつか、ある人にこんなことを聞かれたことがあるんだ。たとえば、こんな星空や泣けてくるような夕陽を一人で見ていたとするだろ。もし愛する人がいたら、その美しさやその時の気持ちをどんなふうに伝えるかって？」

「写真を撮るか、もし絵がうまかったらキャンバスに描いて見せるか、いややっぱり言葉で伝えたらいいのかな」

「その人はこう言ったんだ。自分が変わってゆくことだって……その夕陽を見て、感動して、自分が変わってゆくことだと思ってる」

人の一生の中で、それぞれの時代に、自然はさまざまなメッセージを送っている。この世へやって来たばかりの子どもへも、去ってゆこうとする老人にも、同じ自然がそれぞれの物語を語りかけてくる。

まだ幼かった頃、近所の原っぱで紙しばいを見終えた後、夕ごはんの間に合うように走って帰った夕暮れの美しさは今も忘れない。あの頃、時間とか、自分をとりまく世界を、一体どんなふう感じていたのだろう。一日が終わってゆく悲しみの中で、子どもながらに、自分も永遠には生きられないことを漠然と知ったのかもしれない。それは子どもがもつ、本能的な、世界との最初の関わり方なのだろうか。今思い返せば、自然を違った見方で意識する出来事がいくつか自分にもあった。そのひとつひとつが、アラスカに来るまでの小さな分岐点になっていたような気がする。

最初の体験は、小学生の頃、近所の映画館で偶然観たひとつの映画だった。題名は「チョコと鮫」。ストーリーは、観光開発で変わり始めようとする南海のタヒチ島を舞台に、サメと友だちになった原住民の少年チョコと、ヨーロッパから観光で訪れた少女との淡い恋物語

である。まだ子どもだった**ぼく**が魅<sup>ひ</sup>きつけられたのは、その背景に映しだされたどこまでも続く南太平洋の青い広がりだった。入口で買ったパンフレットには、ハリウッドのセットを使わず、現地で撮られた最初の自然ものの映画と書かれていたのを覚えている。当時チャンバラ映画ばかり見ていた**ぼく**は、突然、世界の広がりを見せられたのだ。本当に衝撃的だったのだろう、**ぼく**はディアンナという少女の名前を今でも覚えている。

やがて**ぼく**は北海道の自然に強く魅<sup>ひ</sup>かれていった。その当時、北海道は自分にとって遠い土地だった。多くの本を読みながら、いつしかひとつのことがどうしても気にかかり始めていた。それはヒグマのことだった。大都会の東京で電車で揺られている時、雑踏の中で人込みにもまれている時、ふっと北海道のヒグマが頭をかすめるのである。**ぼく**が東京で暮らしている同じ瞬間に、同じ日本でヒグマが日々を生き、呼吸をしている……確実にこの今、どこかの山で、一頭のヒグマが倒木を乗り越えながら力強く進んでいる……そのことがどうにも不思議でならなかった。考えてみればあたりまえのことなのだが、十代の少年には、そんなことがひっかかってくるのである。自然とは、世界とは、面白いものだなと思った。あの頃はその思いを言葉に変えることは出来なかったが、それはおそらく、すべてのものに平等に同じ時間が流れている不思議さだったのだろう。子どもながらに、知識としてではなく、感覚として世界を初めて意識したような気がする。

数年前、同じようなことを言った友人がいた。東京で忙しい日々を過ごす編集者だった彼女は、何とか仕事のやりくりをつけて、クジラを撮影する**ぼく**の旅に一週間だけ参加した。前日の夜遅くまで東京で仕事をしていた彼女にとって、南東アラスカの夏の海は、ページをめくるように現れた別世界だった。

ある日の夕暮れ、ザトウクジラの群れに出合った。**ぼく**たちは、小さな船で、潮を吹き上げながら進むクジラのあとをゆっくりと追っていた。クジラの息が顔にかかってくるような近さで、それは圧倒的な風景だった。あたりは氷河と原生林に覆われ、悠久なる時の流れの中で、すべての自然が調和し、息づいていた。彼女は船べりにもたれ、心地良い風に吹かれながら、力強く進むクジラの群れをじっと見つめていた。

その時である。突然、一頭のクジラが目の前の海面から飛び上がったのだ。巨体は空へ飛び立つように宙へ舞い上がり、一瞬止まったかと思うと、そのままゆっくりと落下しながら海を爆発させていった。それは映画のスローモーションを見ているような壮大なシーンだった。

やがて海に静けさが戻り、クジラはまるで何もなかったように力強く進んでいる。ブリーチングと呼ばれるその行動を、今まで何度か見てはいるが、これほど近くで眺めたことはない。人間は動物のすべての行動に解釈を試みようとするが、クジラが何を伝えようとしているのか、結局ぼくたちがわかることはないだろう。クジラはただ風を感じたかったのかもしれない、ただ何となく飛び上がってみたかったのかもしれない。

が、目の前で起きた光景に、友人は言葉を失っていた。彼女が打たれたものは、フレームの中の巨大なクジラではなく、それをとりまく自然の広がりだったのだろう。その中で生きるクジラの小ささだったのだろう。そして一瞬ではあったが、彼女がクジラと共有した時間だった。ずっと後になってから、彼女はこんなふうに語っていた。

「東京での仕事は忙しかったけれど、本当に行って良かった。何が良かったかって？ それはね、私が東京であわただしく働いている時、その同じ瞬間、もしかするとアラスカの海でクジラが飛び上がっているかもしれない、それを知ったこと……東京に帰って、あの旅のことをどんなふうに伝えようかと考えたのだけれど、やっぱり無理だった。結局何も話すことができなかった……」

ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆったりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは、天と地の差ほど大きい。

(星野道夫『旅をする木』1995年、より)

※文章は原文のままである。ただし、一部に読み仮名と下線を付した。

**設問 1** 下線を付した「夕暮れ」「サメ」「ヒグマ」「クジラ」「伝える」「自分が変わってゆく」の言葉をすべて使って文章を 300 字以内に要約しなさい。(35 点)

**設問 2** 文章の末尾に書かれているような、心の片隅にもうひとつの時間が流れていることを意識できることに、どのような意義があるだろうか。あなたの考えを 300 字以内で述べなさい。(35 点)

問題 2 文章 1 および文章 2 を読んで、下記の設問に答えなさい。

### 文章 1

日本人が鋭敏な感受性をもつてみると、さきにいつたが、それを最もよく示してゐるのが季節感といつてよい。我々日本人は、眼で、耳で、鼻で、また肌で、舌で、季節や季節の推移を感じる。雲の色や形で、風や雨の音で、松茸<sup>まつたけ</sup>やさんまを焼くにほひで、乾いた、また湿つた空気<sup>はつがつお</sup>で、しゆんの食物で季節を感じる。「目には青葉山ほととぎす初鯉」といふ素堂（注 1）の句が代表的に示してゐるやうに、五官を通してその折々の季節を感じ取る。そしてまた、咲く花のにはほふが如<sup>ごと</sup>くといつて、時勢や人生の全盛の感情をそれに託し、落葉<sup>ちようらく</sup>において凋落<sup>せきばく</sup>を、秋の夕暮において寂寞<sup>すなわ</sup>を歌つた。即ち心のほどを季節に託して表現した。万葉集以下に「寄物陳思<sup>きぶつちんし</sup>」（物に寄せて思ひを陳<sup>の</sup>ぶ）といふ類の歌があるが、その「物」は多くは雪や月や花、花や鳥や風や月、雪月花、花鳥風月であつた。例へば万葉集巻十に「春<sup>そうもん</sup>の相聞<sup>ふだて</sup>」といふ部立（注 2）がある。その中で鶯<sup>うぐいす</sup>の鳴く声にわが恋人を思ひ、「卯の花くたし」や、藤波、また霜<sup>う</sup>や霞<sup>かすみ</sup>に、わが恋のくさぐさを託してゐる。即ち、思ひも恋も、自然の景物、季節季節の風物において、またそれを通じて歌はれてゐるのである。別にいへば、心が季節の景物において、景物が心において歌はれてゐる。だから季節の感じ方、景物の選び方の歴史<sup>たど</sup>を辿れば、心の歴史の、少くとも一面を明らかにすることができるわけである。

日本人がなぜ季節の変化、四季折々の風物を強く、敏<sup>きと</sup>く感受したか。それにはいろいろの条件が考へられる。日本の風土が、四季折々の変化を、花鳥風月、山川草木において鮮かに示してゐるといふ自然的条件がある。また日本の民族が、春<sup>ま</sup>、播き、秋、収めるといふ農耕の民族であつたといふ社会的条件もある。また日本がいはゆるモンスーン地帯に属してゐて、自然の気象から恩恵と同時に損害をつねにうけて来たといふ地理的歴史的条件もあらう。さらには季節への感受性のほどを美しく示してゐる歌集、古今集以下の八代集<sup>ちやくせん</sup>が勅撰（注 3）であつたこと、後代がそれを学び、まねぶことをもつて雅<sup>みやび</sup>としたといふ文化的条件も考へられる。以上のやうなさまざまな条件が、日本人の季節への鋭敏な感受性をつちかつてきた。然<sup>しか</sup>しさういふ諸条件をいかほど分析的に、合理的に解明しえたとしても、季節美感を解明しえたとはいへない。むしろ合理的分析的に解明してしまへば、は

かなく消えてしまふやうな、そこはかたない気分、気持、こころ、感情の中に、日本人の季節美感、日本語でしか示しえない美しく微かな美感がある。「草臥て宿かる比や藤の花」  
「行春や鳥啼魚の目は泪」、その他どれでもよい、芭蕉の句は、そこはかたない気分をそのままに同感するより外にないやうなものである。

(唐木順三『日本人の心の歴史 上』1993年[初出1970年]、より)

(注1) 山口素堂 江戸中期の俳人。(『広辞苑』第五版)

(注2) 部類あるいは部門に分けること。(『広辞苑』第五版)

(注3) 勅命によって詩歌・文章を撰すること。(『広辞苑』第五版)

## 文章2

諸君はまたそう云う大きな建物の、奥の奥の部屋へ行くと、もう全く外の光りが届かなくなった暗がりの中にある金襖や金屏風が、幾間を隔てた遠い遠い庭の明りの穂先を捉えて、ぼうっと夢のように照り返しているのを見たことはないか。その照り返しは、夕暮れの地平線のように、あたりの闇へ実に弱々しい金色の明りを投げているのであるが、私は黄金と云うものがあれほど沈痛な美しさを見せる時はないと思う。そして、その前を通り過ぎながら幾度も振り返って見直すことがあるが、正面から側面の方へ歩を移すに随って、金地の紙の表面がゆっくりと大きく底光りする。決してちらちらと忙がしい瞬きをせず、巨人が顔色を変えるように、きらり、と、長い間を置いて光る。時とすると、たった今まで眠ったような鈍い反射をしていた梨地(注)の金が、側面へ廻ると、燃え上るように耀やいているのを発見して、こんなに暗い所でどうしてこれだけの光線を集めることが出来たのかと、不思議に思う。それで私には昔の人が黄金を佛の像に塗ったり、貴人の起居する部屋の四壁へ張ったりした意味が、始めて領けるのである。現代の人は明るい家に住んでいるので、こう云う黄金の美しさを知らない。が、暗い家に住んでいた昔の人は、その美しい色に魅せられたばかりでなく、かねて実用的価値をも知っていたのであろう。なぜなら光線の乏しい屋内では、あれがレフレクターの役目をしたに違いないから。つまり彼等はただ贅沢に黄金の箔や砂子を使ったのではなく、あれの反射を利用して明りを補ったのであろう。そうだとすると、銀やその他の金属はじきに光沢が褪せてしまうのに、長く耀やきを失わないで室内の闇を照らす黄金と云うものが、異様に貴ばれたであろう理由を会得することが出来る。私は前に、蒔絵と云うものは暗い所で見て貰うように作られて

いることを云ったが、こうしてみると、<sup>ただ</sup> <sup>まきえ</sup> 菫に蒔絵ばかりではない、織物などでも昔のものに金銀の糸がふんだんに使っているのは、同じ理由に基づくことが知れる。僧侶が纏う<sup>まと</sup> 金欄<sup>きんらん</sup>の袈裟<sup>けさ</sup>などは、その最もいい例ではないか。今日町中<sup>まちなか</sup>にある多くの寺院は大概本堂を大衆向きに明るくしてあるから、ああ云う場所では徒ら<sup>いたずら</sup>にケバケバしいばかりで、どんな人柄な高僧が着ていても有難味を感じることはめったにないが、由緒あるお寺の古式に則<sup>のっと</sup>った佛事<sup>ぶつ</sup>に列席してみると、皴<sup>しわ</sup>だらけな老僧の皮膚と、佛前<sup>ぶつ</sup>の燈明<sup>とうみょう</sup>の明滅と、あの金欄<sup>きんらん</sup>の地質とが、いかによく調和し、いかに荘厳味を増しているかが分るのであって、それと云うのも、蒔絵の場合と同じように、派手な織り模様の大部分を闇が隠してしまい、ただ金銀の糸がときどき少しずつ光るようになるからである。

(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』1975年〔初出1939年〕、より)

(注)蒔絵<sup>まきえ</sup>の一種。漆の塗面に下地漆を塗って金銀の粉末<sup>ま</sup>を蒔き、上に梨子地漆をかけて研ぎ出したもの。金銀粉が漆を通してただらに見え、梨の実の肌に似る。(『広辞苑』第五版)

※文章1および文章2とも、本文は原文のままである。ただし、一部に注と読み仮名を付し、繰り返し記号は本来の文字に改めた。

設問1 文章1において、作者が考える日本人の感受性とはどのようなものか。150字以内で要約しなさい。(20点)

設問2 文章2において、作者の考える美しさとはどのようなものか。150字以内で要約しなさい。(20点)

設問3 文章1および文章2に示された感受性や美意識は、現代生活の中でどのように発揮されているだろうか、あるいは衰弱しているだろうか。あなたの考えを300字以内で述べなさい。(40点)